埼玉インターハイ　１００m決勝

春高陸上部史に深く刻まれた大阪インターハイの決勝から２年。
私の中で高校１００m決勝はいまだに時間が止まっている。しかしそんな回想録に浸っているのはＯＢの私くらいなもので、監督や当事者の石川、田中、後藤、山崎らは、みなそれぞれの道を邁進し続けている。

そして今年の熊谷インターハイ。
昨年の「日本史上最高に暑い場所」という事態を受けて、埼玉では日程を早めたスケジュールで対策した。これが功を奏した結果となり、大会は円滑に、好記録にも恵まれた。
みなが酷暑を想定していたため、意外にも涼しい感さえ受けたであろう。
３５度越えての多湿は世界レベルの選手達にもダメージを与えた。昨年の大阪世界陸上の結果が物語っていた。トップ選手レベでも全く好記録は生まれなかった。

その点、今回の日程繰上げ開催は、高校生にとってはずいぶんとプラス因子になったと思われる。サブトラックでもドリンクが無償で配られ、熱中症対策は万全。
さすが埼玉開催だと感じた。

休診日の関係から、観にいけたのは水曜日の１００mだけとなった。

今回は整形外科の友人も会場にやってきた。
なぜなら医学部、歯学部の陸上大会で懇意にしている古い友人達は、桐蔭のＯＢが実に多い。インターハイにおける神奈川桐蔭学園の活躍も今回の注目点であったのだ。

桐蔭学園といえば、インターハイ史上初の４００mＲ３連覇が期待される強豪である。今回も短距離、ハードルなど多々に得点濃厚。総合入賞は確実。

４００mRは２００６年から続く福島白河旭、宇治山田商との激戦が予想されるだろう。

いよいよ１００m決勝の時間がきた。

なんと桐蔭のライバルの白河旭は決勝に２人進出してきた。しかし桐蔭の早水選手も優勝候補だ。（「はやみ」か「はやみず」かと友人に聞くと「はやみず」と読むとのことだった）

絶好のコンディションで迎えた１００m決勝スタート！

予想通り、久留米の宮崎選手が猛烈なダッシュを決めた。

しかし準決勝から好調な、栃木那須拓陽の本塩選手が上がってきた。
５０ｍあたりで宮崎選手を捕らえた。

アウトレーンから福島の梶選手もぐんぐん伸びてきた。

優勝は８０m地点で抜け出した本塩選手が、唯一１０秒４台をマーク。
２着には後半伸びた福島の梶選手、３着には桐蔭のエース早水選手が入った。

平成20年度全国高等学校総合体育大会

◆男子　100m　　[熊谷スポーツ文化公園陸上競技場]

決勝　　07月30日

順位	選手名	高校名(県名)	記録	
1	本塩　遼	那須拓陽(栃木)	10秒49	
2	梶　将徳	白河旭(福島)	10秒54	
3	早水　勇	桐蔭学園(神奈川)	10秒62	
4	宮崎　孝	久留米大付(福岡)	10秒65	
5	新木　達也	市船橋(千葉)	10秒70	
6	石原　寛之	米子東(鳥取)	10秒73	
7	野村　彰吾	室蘭大谷(北海道)	10秒73	
8	田嶋　和也	白河旭(福島)	10秒81	

２００mは・・・

男子　200m　　[熊谷スポーツ文化公園陸上競技場]

決勝　　08月01日

順位	選手名	高校名(県名)	記録	
1	本塩　遼	那須拓陽(栃木)	21秒51	
2	梶　将徳	白河旭(福島)	21秒52	
3	鈴木　大介	名古屋大谷(愛知)	21秒73	
4	野村　彰吾	室蘭大谷(北海道)	21秒85	
5	浅田　清貴	出石(兵庫)	21秒86	
6	田嶋　和也	白河旭(福島)	21秒98	

7	中川　郁哉	伊万里（佐賀）	22秒15	
	斎藤　隼也	東農大三（埼玉）		失格

２００６年大阪総体の２００ｍで後藤を抑え優勝した我孫子選手は、ゴール後「たっていられないくらい苦しかった・・・」と酷暑の状態を語った。
高校生といえど、１００ｍ、２００ｍの二冠は３５度を越える気温では極めて苦しい。
（昨年は台風という、また特異な気象で１００ｍ２００ｍ二冠があったが・・・）

しかし幸いに３０度ほどの気温、晴天で推移した熊谷総体では、１００ｍの覇者が２００ｍも制した。

３連覇のかかった４００ｍＲは、桐蔭は惜しくも優勝を逃した。４位。
１走者の水野選手は１１０ｍＨで４位、４００ｍＨで２位と大活躍した。少々疲労があったか・・・・

それでも桐蔭学園は総合４位という素晴らしい成績をおさめることができた。

男子　学校対抗最終成績

08月02日

順位	高校名（県名）	得点
1	仙台育英（宮城）	28
2	白樺学園（北海道）	24
3	青森山田（青森）	23
4	桐蔭学園（神奈川）	22
5	宇治山田商（三重）	20
6	宮崎工（宮崎）	19
7	白河旭（福島）	18
8	那須拓陽（栃木）	16

（仙台育英は初優勝）

筆　３７回　のもと歯科